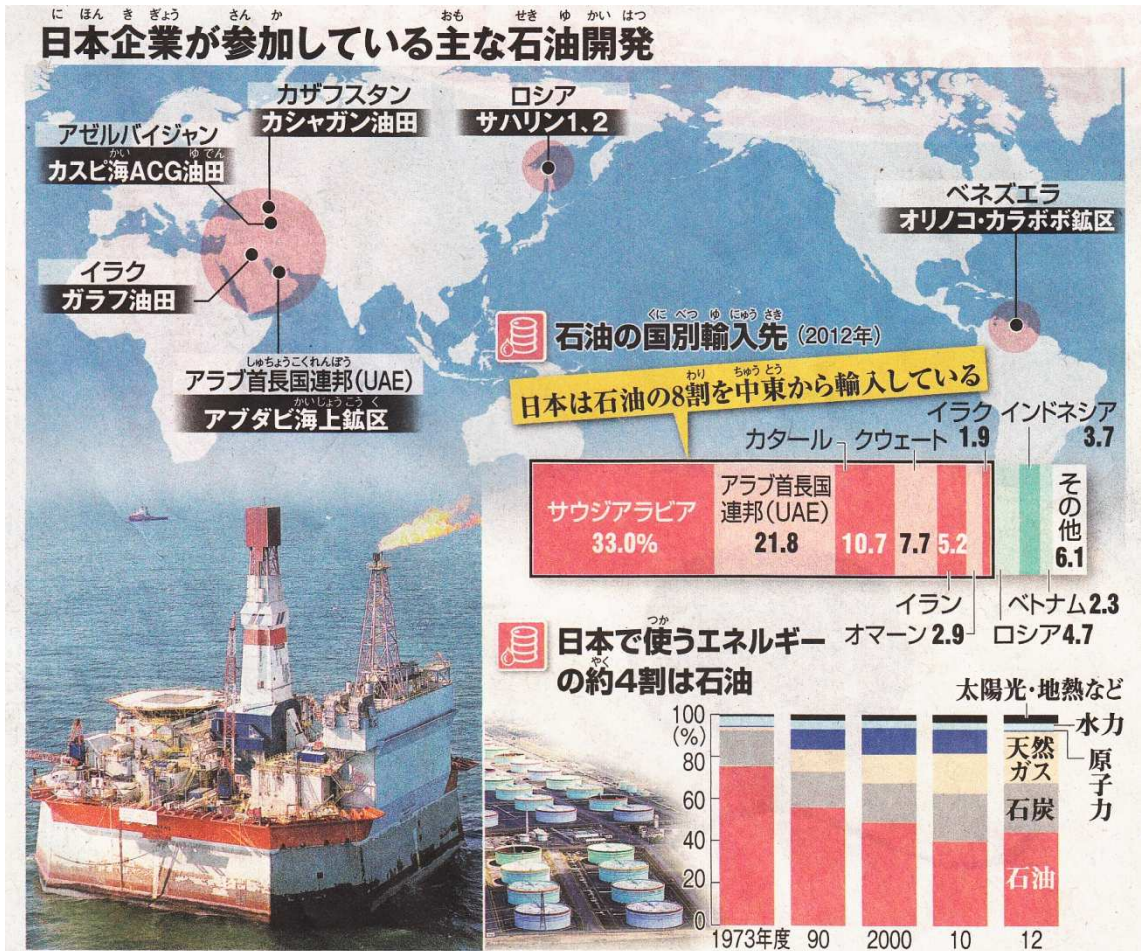


日本で使うエネルギーの約4割は石油 石油の8割を中東から輸入している



開発が進む新しい資源

油田権益確保の取り組みを強めるきっかけは、1973年の「オイルショック」だった。「第4次中東戦争」と呼ばれるイスラエルと中東アラブ諸国との戦争が起き、中東の産油国は、イスラエルを応援する米国などに対抗するため、石油の価格を引き上げたり、輸出を禁止したりした。石油の価格は急激に上がり、世界中が大混乱した。日本でも物価が上がり、トイレトーパーなどの日用品を買いだめる人が相次いだ。

この反省から、日本は自主開発油田を増やすだけでなく、エネルギーを節約し、なるべく石油以外のエネルギー源を使うようにしてきた。この結果、オイルショックが起きた73年度は、国内で使われる全エネルギーの75%が石油だったのに、いまは44%にとどまっている。さらに、新しいエネルギー源の確保にも力を入れている。そのひとつが、米国やカナダでとれる「シェールガス」だ。新しい種類の天然ガスで、技術の進歩で掘り出せるようになった。値段も安い。昨年、米国産シェールガスの日本への輸出が初めて認められ、2017年にも輸出が始まる見通しだ。

国内では、メタンガスと水が結びついたシャーベット状の海底資源「メタンハイドレート」から天然ガスを取り出す技術の開発に取り組んでいる。日本近海に大量に埋まっており、昨年3月、世界で初めて取り出しに成功した。政府は27年ごろまでに、ほかのエネルギー並みの費用で確実に取り出せるようにしたいという。

(鈴木友里子)